

# 国際関係は科学か？

ロンギン・パストウシヤク

『ポリテイカ』一九六八年第一二号

〔編集者まえがき〕最近、ポーランド政治学全国大会でロンギン・パストウシヤク助教授 (Longin Pastusiak) は、国際関係が独立の科学部門であるとの命題を提起した。われわれは論争を展開するために彼の論述を要約し、コンスタンティ・グジボフスキ教授 (Konstanty Grzybowski) におくった。グジボフスキ教授は、提出された命題に同意はしたが、若干の疑念をいだいている。以下にパストウシヤク助教授の発言の要旨とグジボフスキの回答を掲載する。

最近までまだポーランドの学界では、政治学 (political sciences) が存在するかどうか、対象の範囲、その方法論はどのようなものかについて論争が展開されてきた。いわゆる“ポリトロギア” (Politolgia) の支持者を有利にした重要な契機は、政治学中央研究センターの創設、大学の教科目としての政治学原論の採用、およびワルシャワ大学政治学研究所の創設であった。

もちろん、行政上の決定は、うたがいなく学術上の、同時にまた政治的な前提をもとにしてはいるが、なんらかの科学部門が存在するかいなかを決定する論拠とはなりえない。しかし行政上の決定は、ポーランドにおける政治学のような若い部門の発展を促進することができる。

われわれは、論争や討論がとだえることのないように希望する。

いまや、なによりも、まず科学的研究により、この対象の型(モデル)を究明しなければならない。そのためにはまた、この分野での作業のための科学要員の養成計画を作成する必要がある。そうしてはじめてこの分野での長年の荒廃状態を改善しうるであろう。

ところで、独立の科学部門としての国際関係の問題を討議のために提起したい。私は国際関係を政治学の重要な構成部分として位置づけている現状に満足しているといわなければならない。同時に、ポーランドにおいてポリトロギアが発展し、ポーランド科学の組織体系のなかでのこの対象の地位が固まるにつれて、国際関係がますます分化し自立化するといった情勢が生じることは避けられないように思われる。それが論理的な合法則性である。どんな科学部門も、とりわけ詳細に研究される一定の諸問題の分化と体系化が生じる一定の発展段階では、いくつかの部門、小部門などに分かれはじめるものである。かつて政治学は歴史学、法学などから分化した。それは時の試練にたえ、自らの対象ならびに研究方法を見いだした。それが発展し、国家制度が進化し、国際関係の性格がますます複雑になるにつれて、徐々にグループ分けされ区分され体系化される問題の数はふえつつある。こうしてアメリカ合衆国では、たとえば、伝統的な政治学(ポリテイカル・サイエンス)という意味での)

枠内で、政治学の領域にとどまった国民的および国内的制度にかんする諸問題と、国際関係 (international relations)、世界政治 (world politics)、国際問題 (international affairs)、対外政策 (foreign policy) 世界事情 (world affairs)、国際政治 (international politics) などと称せられる、国家間の関係にかんする諸問題が区別されはじめた。

こうして、国際政治の問題にかんする研究から、政治学の支配的概念の枠内にもはやはいらなくなった諸問題が徐々に分化しはじめた。新しい科学——国際関係——について語られはじめた。方法的な探究がはじまり、国際関係論を究明するための最初の試みがくわだてられた。

「国際関係」の対象となるのは、<sup>(原註)</sup> 国家間の関係であって、語源から予想されるような民族間の関係ではない。国家は多民族的でありうるし、この分野で問題となるのは主として国家間の関係であるがそれだけにかぎるわけではない。

国際関係 (対象としての) は国家間の関係よりもはるかに広い問題領域をふくんでいる。しかし、事実、国家ならびに国家と外界との関係がこの対象に大きな認識的価値をあたえるようにみえる。どんな部門の研究対象も物質、世界ないしこの世界の一部分であると単純化して言うなら、世界を分かっている基本的単位のあいだの関係——国家間の関係を研究のうえでどうして無視することができようか。それにたずさわるのは歴史学であるという人がいるかもしれない。もちろんそうではあるが、部分的にすぎないし、また歴史学に由来する科学は、現代世界の認識には限られた程度で適用されうるにすぎない。

われわれは、われわれの周囲で生じる過程の重要な認識的用具——マルクス主義的社会発展法則——を有している。もちろん社会の発展過程は長期的過程であり、しばしばジグザグに進行しうる。進歩的勢力と反動的勢力が長期にわたって衝突するのは、当然である。国際関係の専門家の課題は、合法性を取りだし、それらを偶

然的で本質的でないものから引きはなし、あらゆる要因を綿密に体系づけ、これらの要因が国家間の関係に影響する程度を明らかにすることである。したがって、国際関係において合理的要因が作用しており、圧倒的多数のばあいにはうたがいがなくそうであると仮定すれば、科学的一般化のための十分な研究基盤となる合法性は存在している。

国際問題専門家のあいだでは、対象の範囲について意見の相違がある。なぜなら、直接、間接に国際関係があつかう多くの問題は、なんらかの伝統的科學部門と結びついているからである。プラハ国際政治經濟研究所の A・オルト (Ort) 博士の作成した図に補足したものが別掲の図である。

以上のことからわかるように、国際関係は諸部門にわたる (inter-disciplinary) 分野である。研究もまた同じような性格をもたなければならぬ。そのためには、さまざまな分野の専門家の集団作業が必要である。クウインシー・ライト (Quincy Wright) 教授は、国際関係の分野での研究のためにきわめて重要な二三の科學部門をあげている。こんにち、国際関係は、自らの分野の方法論だけを利用する歴史家や法学者や經濟学者がもっとも重要な国際問題を全面的に分析することが不可能なほど総合的な問題であり、しかもそれほど複雑な問題である。經濟学者は国際經濟關係を詳細に研究することができ、法学者は国際關係の法的側面を研究することができ、しかしそれだけが、全体を、総合的、政治的に考察しなければならぬ。ここでも、国際關係學者の課題はとりわけ困難である。科學發達史がしめしているように、諸部門のあいだの境界を厳密に規定しようとする試みはつねに二つの側面をもっており、發達を刺激し促進したが、これを困難にし、おくらせもした。この点から、固定的な規定の性格をもつ社会科学上の定義にたいする取扱いは、とくに新しいもの、ようやく形成され定式化されかけているようなもののばあい、きわめて慎重でなければならない。詳細な、綿密な研

究にもとづいて一般化に到達するのであって、研究が一般化に従属するのではない。科学分野としての国際関係についても事態はまさにそのようなのである。その将来は研究の結果にかかっているものであり、それがしかるべき認識材料を提供するなら、国際関係を独自の科学分野とみとめることになんどのぐあいのわるいことはない。

私はこの問題をきわめて慎重に扱ってはいるが、多くの国の学者たちが国際関係の分野ですでに一定の成果を提示できることを認めなければならぬ。ともかくも、この成果は、その対象の限界を規定する試みをあえてするほど大きいものである。

このようにして、国際関係の科学的研究の対象は思想的、政治的、経済的、法的、軍事적および文化的な面から見た国家間の相互関係であるということが出来る。国家のあいだ、あらゆる種類の運動および社会的勢力(たとえば国際労働運動)のあいだの、あるいはまた国際政治、経済その他の団体の枠内での関係に影響するあらゆる要因が、研究の対象である。それは、他国の国内情勢——土台と上部構造——の分析、研究もまた国際関係の課題であることを意味する。対外政策が国内的関係の国際面での延長であるとすれば、国内的関係の認識と考察をぬきにして対外政策面での決定採択の過程の科学的分析は不可能である。

国際関係学のまえには、考察と科学的分析をくわえられるべき問題がつきつきと付けくわえられる。政治的実践はますます多くの疑問符をだしてくる。実践家が学者にたいしていつそのいらだちをもつてつきつきからつきへとし新しい問題への答を期待することをまた考慮しなければならぬ。こんにちではもはや、大ざっぱな答ではなんびとをも満足させることはできない。科学は、国際労働運動の統一と協力というむつかしい問題、社会主義共同体内部の関係、いわゆる第三世界の将来、国内政策と対外政策との結びつき、統合の過程、現代資本主義における変化、資本主義から社会主義への移行の問題、国際関係にたいする科学技術革命の影響などを研究し、検討

しなければならぬ。

「国際関係」の概念そのものが進化しており、ますます一義的に社会主義と資本主義とのあいだの闘争に帰着しているという見解がある。それはまだ研究者にとって、一つの魅力的なテーマであるにすぎない。社会主義世界体制は新しい社会主義的国際関係の端緒をひらいたとしばしばいわれるが、実際にはこの問題は、科学と実践にとつて絶大な意義をもっているにせよ、学者によってまだ十分に検討されていない。

ここでたんなる例としてあげた問題は、政治的実践の緊急の問題であるだけではなく、深い理論的研究の対象でなければならぬ。それは未来をもつた分野であるといったとしても、誇張におちいることはないであろう。世界が依然として国家という基本単位に分かれていくかぎり、世界政治と呼ばれるゲームで国家が主役であるかぎり、これらの単位のあいだの関係の総合的研究という困難な課題にとりくむ科学にたいする要求は存するであろう。

あらゆる国々の増大していく相互依存関係、たえずつきつきにおきてくる新しい問題は、民族間、国家間の関係を形成する要因と現象を整理し体系化することのできる科学部門にたいする大きな要求を生みだす。国際関係にかんするブルジョア科学の弱点は、この分野の現象を土台から切りはなして考察し、あまりにばらばらの孤立した事実で熱中することである。レーニンはつぎのように指摘している。「ばらばらの事実ではなく、検討すべき問題にかんする事実の総体をどんな例外なしに考慮することが必要である。なぜなら、そうしなければたえず疑念が生まれるからであり、事実が恣意的にえらばれ、それが全体的にとらえられた歴史的現象の客観的関連や相互依存関係に代わっておそらくはきたならしい事態の正当化のための『主観主義的混合物』として現われるという、根拠ある疑念が生まれるからである。」

長もちすることができるのは、生活との対置の試練にたえるよう

な科学や理論だけである。国際関係にかんする科学は、政治的実践との協力のもとで発展しなければならない。しかしそのためには、実践がこの科学部門の長所をみとめることが必要である。なぜなら、国際関係の分野での科学研究は、実践に提案すべき多くのものをもっているからである。

NP	H	P	E	F	S	G	
PS	HPD	PM	MSG	TRS	SP	GS	国際関係論
NP	政治学	PS	世界政治学				
H	歴史学	HPD	一般史学・外交史学				
P	法学	PM	国際法学				
E	経済学	MSG	国際経済関係論				
F	哲学	TRS	社会発展論				
S	社会学	SP	政治社会学				
G	地理学	GS	世界地理学				

(訳註) 「国際的」という意味のポーランド語 “międzynarodowy” は語源的には「民族 (narod) のあいだの」という意味である。